# 記憶をつなぐ媒体としての建築

木下（きのした）　昌大（まさひろ）
京都工芸繊維大学 准教授／キノアーキテクツ 建築家

## 1　人々に共通の記憶を持たせる建築

建築の機能や性能は経年によって衰えるが、改修や修繕を行えば持続的な使用が可能だ。しかし、それを実現するためには、改修してでも使い続けたいと思わせる何かが必要となる。その「何か」とは、その建築を残して使おうとする人々が共有する集団的な記憶ではないだろうか。ある建築が人類の記憶を未来につなぐために必要だと判断されれば、それは世界遺産として保存される。また、街の記憶を未来につなぐために必要と判断されれば、文化遺産やそれに相当するものとして保存される努力がなされる。建築が人々の記憶をつなぐ役割を果たすのであれば、その役割を全うし、改修や修繕を通じて持続的に使われ続けることになるだろう。

では、どのように設計すれば、人々に共通の記憶を持たせる建築を作ることができるのだろうか。より多くの人の記憶に残り、残される存在になるためには、最初から多くの人に使われる建物であるか、あるいは、少人数のためであっても長く存在し続け、やがて多くの人が目にする風景の一部となるかのいずれかだ。

前者は、公共性の高い建物が優位となるが、それでも経済合理性の観点から解体されるのが現実であり、単に多くの人に使われるだけでは不十分だ。その建物が多くの人々の記憶に深く残り、保存して使い続けることに多くの賛同を得ることが必要になる。

後者は住宅のようなものだ。住宅は住人のための建物であり、公共的な建物ほど数的な優位性はないが、住人にとっては個人的な記憶の媒体となる。そのため、少数の人々にとっては強く残したいと思わせる存在となるが、その少数の人々がいなくなると、残したいという動機もまた消えてしまうだろう。集団の記憶を形成するためには、個人的な記憶が積み重なっていくことが必要だ。ここで、そのようなことを考慮して設計した二つの事例を紹介する。

## 2　一つ目の事例：福岡市立平尾霊園合葬式墓所

近年の少子高齢化や核家族化、さらには死生観の変化により、新たな形態の墓地を求めるニーズが高まっている。福岡市は、こうしたニーズに応え、平尾霊園内に合葬墓を計画した（**図1・2**、**写真1～4**）。霊園は市民の公園としても機能しており、公園と合葬墓の共存が求められた。この合葬墓は、様々な立場の人々が利用する公共の墓所であるため、特定の宗教観を表すデザインは避けなければならない。一方で、お墓は非常にプライベートな場でもある。誰もが公平に利用できながら、個々の思い入れを抱ける場所である必要がある。公共性を持ちながらもプライベートな空間

**写真1　全体鳥瞰**：建設で生じる掘削土で埋蔵室を埋設し、屋上を緑化。近隣住宅や広場からは墓でなく山が目に映るようにした

**図1　配置図**

**図2　3Dスキャンデータから作成された断面画像**：左から公園、休憩所、参拝所、献花台、山に埋められた合葬式墓所　©京都工芸繊維大学

**写真2　公園側から合葬式墓所方向を見る**：公園と参拝所。日常と非日常が背中合わせで共存するために円弧状の壁をデザインした

**写真3　休憩所から献花台を見る**：特定の宗教色が現れぬよう、門型の献花台で埋蔵室上部の山の風景を切り取り、自然が参拝対象の墓所にした

**写真4　山に対して故人を偲ぶ献花所の様子**：山の植栽は、既存の山の樹種だけでなく、ヤマブキやイロハモミジなど四季を通じて豊かな表情を見せる樹種も植栽した。住宅地からの視線は休憩所の壁が受ける

であり、多くの人々の祈りの場でありつつも、特定多数のための場でもある。こうした相反する関係性を解決するために、山の力を借りることにした。自然が作り出す多様な景色や変化の中に、それぞれの人が個人的なシーンを見出すことで、それが故人とつながる記憶に変わると考えた。

かつて平尾霊園を造成するために削られた山々。その山々の緑を修復するように、山裾を広げ、その下に埋蔵室を設けた。故人は山々に抱かれて眠り、訪れる人々は山裾に設けられた献花台に花を手向ける。その献花台を円弧状の休憩所が囲み、人々は山を望みながらベンチに身を委ね、故人への思いを馳せる。また、円弧の外側には、既存の樹木を活かした広場を設けた。壁が献花台を隠しているため、外側からは山の緑だけが目に映り、広場で過ごす人々は山を故人の眠る場所としてではなく、自然の風景として受け入れる。故人は山に抱かれて眠り、遺された人々は山を前にして故人を思い、子どもたちは故人に見守られながら、山の広場で遊ぶ。このように、山という自然のポテンシャルを最大限に活かし、自然と共存する合葬墓を実現した。

## 3　二つ目の事例：伊根町文化振興多世代交流施設「伊根の杜」

「伊根の杜」は、住人が旅立った後の民家を、町の人々が交流する場として再生したプロジェクトだ。この施設は、京都府伊根町伊根浦伝統的建造物群保存地区(以下「重伝建地区」という)内に位置し、伊根町が寄付を受けた民家を改修、増築して、図書館として再生した(**図3、写真5～12**)。このプロジェクトの背景には、町の未来を担う子どもたちを含めた多世代の町民が文化振興と交流を図るための場を作りたいという思いがあった。この建築では、過去、現在、未来をつなぐことを目指し、三つのスケールでのアプローチが行われた。

まず、ランドスケープスケールでは、伊根町の独特な地形と漁場を背景に、舟屋、主屋、蔵が形成する集落構造の継承を意図した。民家の主屋を改修し、その奥に新たに本を収める二つの蔵を増築した。これらの蔵は、既存の蔵と連なり、伊根の風景を敷地に引き込むことで、町の固有の風景を維持しつつ、新たな用途を持つ空間として再生させた。

次に、建築スケールでは、重伝建地区の対象となる建造物を慎重に保存・修復しつつ、図書館としての機能を付加した。保存の過程では、現存する建物とわずかな資料に基づき、慎重に復元が行

**写真5　北東側俯瞰**：海と山に囲まれた伊根浦の街は、海に面する舟屋と、山裾に並ぶ蔵、そしてその中間に位置する主屋で構成されている。改修対象となる主屋(写真中央)に加えて、二つの蔵(物語の蔵・知識の蔵)(写真右中央)を増築し、重伝建地区に指定される街並みへ溶け込ませることを考えた

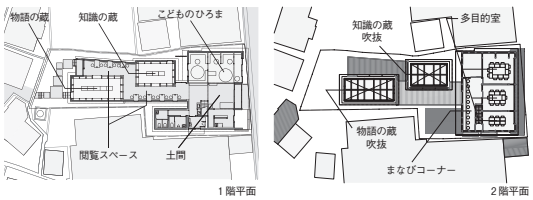


**図3　平面図**

**写真6　「物語の蔵」西側外観**：周辺の蔵のスケールを踏襲し、奥の里道へとつなげる

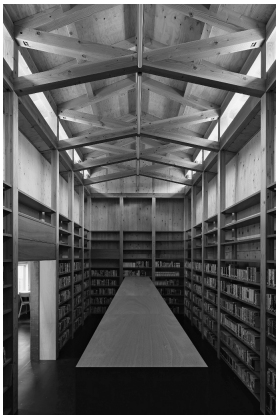

**写真7　「物語の蔵」内観**：最高高さ5,300mm。既存の蔵の持つ屋根と壁の構成やプロポーションを踏襲しつつ、現代的な工法により、図書館として求められる機能を満たした。ハイサイドから間接光を得る

**写真8　下屋に設けた閲覧スペース**：屋根を支える独立柱は、窓台を伸ばして設けたデスクを支えつつ、程よく空間を仕切る

**写真9　改修前外観**：重伝建地区に指定される前に、必要に応じた改修が繰り返されていた

**写真10　改修後外観**：伊根町の重伝建地区修景基準と復元図を基にして改修した東側外観

われたが、新たな用途に応じた最適化が必要だった。その結果、当初の建物とは完全に一致しないものの、建造物群全体の風景としての保存が達成された。

最後に、断片スケールでは、人の記憶に残る断片を重視した。柱の傷や梁の木目、板の節など、五感で感じる手触りが記憶に残るように、改修前の建物から断片を採取し、新たな建物に再利用した。こうして新旧の断片が一体となった空間が生まれ、利用者が触れることで、その記憶が未来へとつながっていくことを目指した。

## 4　まとめ

これら二つの事例は、建築が単なる物理的な構造物としての役割を超え、記憶を未来につなぐ媒体として機能することを示している。福岡市立平尾霊園合葬式墓所は、個々のプライベートな思いと公共性を調和させたデザインによって、人々の記憶を自然と結びつけ、持続可能な社会インフラとしての墓を実現した。一方で、伊根町文化振興多世代交流施設「伊根の杜」は、町の歴史と人々の記憶を尊重しながら、新しい世代のための文化交流の場として再生された。このように、建築が個人や集団の記憶をつなぎ、未来へと受け継がれていく存在であり続けるためには、単なる保存や修復ではなく、社会や文化の変化に応じた柔軟な設計と更新が必要だ。記憶の媒体としての建築が、これからも私たちの生活や文化を支え続けるためには、時間とともに変化しつつも、私たちの記憶をしっかりと抱え続ける力を持たせることが重要であるといえるだろう。（写真：中村絵、キノアーキテクツ）

**写真11　玄関土間**：改修で復元された土間が、人々を受け入れるエントランス空間となる。既存の柱梁だけでなく長押なども再利用することで、新旧の断片が混ざり合う

**写真12　主屋2階の多目的室**：多様な活動を想定し、既存を再利用した襖で仕切ると大中小三つの空間となる。既存の梁の下から材を添え、耐力を確保した